

ザメンホフの家族たち

あるエスペランティストの精神史

高杉一郎





ザメンホフの家族たち

高杉一郎



田畑書店



ザメンホフの家族たち

定価2400円

1981年7月10日 第1刷発行

発行部数 2300部

著 者 高杉一郎

発行者 石田 明

発行所 株式会社 田畑書店

〒107 東京都港区赤坂4-8-19 表町ビル301号

電話代表 03-403-5819 振替東京5-103763

印刷・文楽印刷 装本印刷・アジア企画群 製本・山本製本所

©1981

1036-360152-4429

ザメンホフの家族たち

目次

I 戦争まで

- 戦争まで 6
ある日の三木清 12
淡徳三郎と露和辞典 14
昭和十二年夏 18
片山敏彦の書齋 21

II シベリア

- 動員前後 54
関東軍の最後 57
貨 車 66
一冊の法律書 75
ウォトカの思い出 79

III ひとつの戦後

- ブラックふたたび 112

- 俞鎮午のこと 25
目白時代の宮本百合子 33
鎮魂・長谷川千秋 38
桔梗五郎の手紙 45
チャンドラ・ボースの記憶 50

- 夏 83
ペールワヤ・マーマ
わが著書を語る 86
不幸な懷疑 99
書物の運命 108

- 竹内好との往来 126

ロシアの森で 116

モスクワでの会話 120

中野重治 122

ガリラヤ湖畔で 133

ケルト民族のころ 137

IV ザメンホフの家族たち

伊東三郎——国境を超えた詩人—— 142

ある平和主義者 149

ヒロシエンロの足跡をたずねて 152

二つの死 167

日中エスペラント交流史の試み 170

『阿Q正伝』のエスペラント訳 187

中国のエスペランティストたち 190

世界語者としての巴金 205

スペイン戦争への旅 223

エスペラントの擁護 226

V 道づれたち

ロマン・ロランの『道づれたち』 240

かたくなな家庭教師とやさしい女友だち 246

マサリック博士とカレル・チャペック 251

トルストイの小さな胸像 255

徳富蘆花とレフ・トルストイ 259

ジョン・デュウイと五四運動 272

『吼えろ！支那』の作者トレチャコフ 278

エレンブルグと広津和郎 286

馬思聰のこと 304

チャールズ・ラムの系譜 309

福原麟太郎先生追悼 313

Ⅵ 創作

遠い人 316

冬を越す宮本百合子 333

へんな先生 349

初稿発表誌紙 Memorandum. 368

あとがき 371

I 戦争まで

戦争まで — 『文芸』編集者として —

昭和十年代のほとんどすべてを、私は改造社で雑誌『文芸』の編集者として働いた。入社試験を受けたのは、昭和八年春のことで、試験問題のひとつにカッコづきの「国民革命」というのがあった。当時、そのような表現はまだ耳なれないものであったが、ともかく私は、その年のはじめにドイツで政権をとったナチスのことを反ファシズムの立場から説明することができた。試験場の壁には、『文芸』の創刊を予告するポスターが一枚ぶらさがっていて、そのキャッチ・フレーズのなかに、「文芸復興」という言葉がつかってあった。私は、なんて大げさな表現だろうと思った。

昭和六年の満州事変以来、日本の左翼運動は急速におとろえはじめ、八年には共産党の幹部が相ついで転向を声明した。「文芸復興」というのは、それまで多数の作家をなんらかの意味で金縛りにしていたプロレタリア文学理論、その政治と観念の偏重から文学を解放しようという意味の合言葉であるらしかった。誰もが好んで懷疑と不安を口にし、改造社ではシェストフの選集を出版中だった。そのような風潮のなかで、秋にはいると『文学界』と『行動』が創刊され、つづいて『文芸』も創刊さ

れた。

入社後およそ二年間、私は自分でも感心するくらいによく勉強した。勉強というのは、内外の定期刊行物をできるだけ数多く、できるだけ丹念に読むことだった。そして二年後には、私はあらゆる編集者に特有な、あの同時にさまざまな世界をのぞくことのできるふしぎな複眼を完全に身につけていた。私は、島木健作や村山知義の転向文学も、小林秀雄や河上徹太郎の評論も、中条百合子や中野重治の小説も、おなじような距離からおなじ程度の関心で読む技術をいつのまにか覚えこんでいたし、ソヴェトの同伴者文学にも、ドイツの亡命者文学にも、あるいはフランスの行動主義文学にも、おなじように注目する習慣を身につけた。要するに私は、あらゆる商業主義的なジャーナリズムにつきものの、精神の三重、四重生活にだんだん慣らされていったのだった。

だから、保田与重郎が昭和十一年の『コギト』に「戴冠詩人の御一人者」や「日本の橋」を發表したときにも、私はそのとっつきにくいスタイルと耳なれない語彙にすこしの不平も言わないで、謙虚にこれを読んだばかりでなく、あくる十二年の『文芸』には、三号にわたって彼の「明治の精神」のために大きなスペースをさいた。保田の仲間である伊藤佐喜雄の小説「花の宴」や田中克己の詩集『西康省』などは、むしろ愛読しさえしたことを告白しておこう。西鶴のかわりに神皇正統記を、明治以後の近代文学のかわりに明治天皇御製をおきかえようと主張する、いわゆる「新国学派」の「勤王文学の系譜」などというものは黙殺したが、「根なし草の知性」にたいする彼らの警告にはちゃんと耳をかたむけた。

それでは私たちはまったくノン・プリンスプルの不^{みずてん}見^み転^{てん}だったのかというと、そうではなかった。やはり、最少限の抵抗意識はいつでも心の底にあった。それはおもに当時のヨーロッパの文芸雑誌か

ら教えられたもので、昭和十年以後、毎年ひらかれるようになった文化擁護国際作家大会の精神に従ったものだった。なかでも、私はトマス・マンがチューリッヒから出していた『尺度と価値』^{『マ・ウント・クェルト』}という雑誌からたくさんのことを学んだ。マンがその雑誌の副題としてかかげた言葉は、「自由なドイツ文化のために」——つまり、民族文化を、だが権力の奴隷でない、自由な民族文化を！——というのであった。

昭和十一年の二・二六事件以後、私たちはこの抵抗意識をすこしずつはっきりさせていった。文学のワクのなかでおこなわれるかぎりにおいて、いわゆる日本主義的な発言を拒否しなかったと同時に、当時、権力によって直接間接に発言をおびやかされていた作家たちには、できるだけ多くの発表の機会を提供した。農民文学や大陸開拓文学、朝鮮文学や満州文学など、戦時体制の日本の要請のなかから生れてきた文学にスペースを拒まなかったと同時に、日本のような動きに脅威を感じていたお隣りの中国のあたらしい文学の紹介も怠らなかった。こうして、魯迅、蕭軍、蕭紅などの文学が『文芸』に紹介されたし、そのころ市川で晴耕雨読の生活を送っていた郭沫若が直接に日本語で書いた文章も発表された。

昭和十二年の七月に、いわゆる「シナ事変」がはじめられたときには、私たちの雑誌はちょうど日中作家のあいだの往復書簡を発表しはじめたばかりであった。最初に、七月号で蕭軍と中野重治が、つづいて九月号で夏衍と久板栄二郎が、手紙のやりとりをした。さらにひきつづいて、丁玲と中条百合子の往復書簡が用意されてあったが、これはとうとう発表することができなかった。しかしその後もお、私たちは胡風の評論、張天翼や老舍の作品を紹介したばかりでなく、その年のおわりの号には増田渉や松枝茂夫の中国文学研究会に依頼して、日本ではじめてと思われる『現代支那文学辞典』

の編集をしてもらったりした。

だが、戦争は日一日とはげしさを加えていった。やがて南京も陥落して、日本の陸海軍は対支積極政策を決定した。国内では国家総動員法が施行され、新聞雑誌の用紙統制がきびしくなり、検閲が強化された。そんな環境で、あらゆる言論は、歴史の進行のまえになんの力もたないように思われた。文学は、戦争以来その素材をゆたかにし、視野を拡大したかもしれないが、それに反比例して、トマス・マンのいう「詩の根源にあるもの」をすっかりなくしてしまったように思われた。私は次第に雑誌編集の仕事に情熱を失って、口ぐせのようにこう言った。

——僕はもう賈金づくりに嫌気がさしてきた。もっと手ごたえのあるほんとうの仕事がしたい。そのとき、関東軍司令部にいた義兄が、満州国政府のなかにあるゆったりした椅子を見つけて、誘ってよこした。虚をつかれた私はあきらかに動揺して、すでに姓を改めていた宮本百合子に相談した。それになりたいする彼女の答えが、昭和十三年九月号の『中央公論』に発表された短編「杉垣」である。私はその短編のいわば裏がわを、彼女がなくなったあとで、「冬を越す宮本百合子」という小さなスケッチのなかに書いた。

「杉垣」で氣をとりなおした私は、もう一度編集の仕事に立ちむかっていった。しかし、はたしてそれがよかったかどうか私にはわからない。ただ、日本が中国に侵略戦争をおこなっていたかぎり、私たちが情性的で無氣力なものであったにせよ、抵抗意識をもちつづけたということだけは言っているであろう。

ところが、やがて戦争がヨーロッパに飛火し、それがふたたびアジアにかえって、日本が昭和十六年の暮についにあの絶望的な太平洋戦争のなかにとびこんでいくと、私たちは一夜のうちに自己麻酔

にでもかかったように、抵抗意識をすてて、一種の聖戦意識にしがみついていた。A B C D 帝国主義諸列強の包囲網にたいする防衛という考えにとりつかれたのだった。

十二月八日の晩、灯火管制がしかれてまっくらな銀座通りを、私は同僚でもあり文芸評論家でもあった寺岡峰夫といっしょに、興奮した声で話しあいながら歩いていった。当時、禅の哲学などに興味をもっていた寺岡は、暗闇のなかでとつぜん「喝!」と叫んだりして私をびっくりさせた。

その晩にかぎって酒を思いあきらめ、まっすぐに阿佐谷の家に帰った私は、戸棚の奥をさがして、モスクワから出版されていた英語版『国際文学』のバック・ナンバーを見つけた。それは、ソヴェト・ロシアがドイツ軍から攻撃をうけたときの特集号で、Will to Fight という見出しのもとに、あらゆるソヴェト作家たちがファシズムと戦いぬく決意をのべていた。そして、それにつづけて、コサック兵の出陣の風景をえがいたショロホフの短篇などがのっていた。

あくる朝、その雑誌をもって出社した私は、『文芸』にそれとまっただくおなじ形式の編集を計画し、たくさん作家たちに「戦いの意志」を書いてくれるように依頼の手紙を書いた。依頼をこたわってきた作家はひとりもいなかったし、私自身がその編集プランに小指の先ほどの疑いももってはいなかった。

以来、軍報道部や情報局におん覚えのよくなかった改造社は、「生きのびるために」そのころの「指導的な」評論家であった斎藤忠、大串兎代夫、難波田春夫の三人を編集顧問にえらび、毎月一回、「旧体制的な自由主義思想」に毒されている私たち編集部員を再教育することになった。編集者にとってこれほどひどい侮辱はなかったけれども、私たちは誰ひとりこれに抗議しなかったばかりでなく、みずからも仮面を合理化することのできそうなもつともらしい理論には、よろこんでとびついていった。

『文芸』はペラペラな形にやせほそり、そのどのページにも文芸のブの字も見いだせない惨めな文芸雑誌になっていった。

しかも、そんなにまで悪あがきをした結果として、私たちがむくいられたものは、結局、昭和十九年七月の東条内閣による改造社および中央公論社の解散命令でしかなかった。そして、私はそのあとすぐ戦争にひっぱりだされた。

ある日の三木清

中央線中野駅の近くにあったソフィアという古本屋のあるじは上智大学出身の朝鮮人で、本のことがよくわかり、いい洋書をたくさんあつめていたし、私たち貧乏学生の持ちこむ本を高く買いつてくれた。中野の野方町に住んでいた私は、よくこの店を訪ねて、本を買いもしたり売りもした。

あるとき、私が数冊の本と雑誌——プレハローフの『ロシア社会史』（フランス語版）、ポール・ラファルグの『経済決定論』、カール・カウツキイの『トマス・モアとそのユートピア』、それにマイケル・ゴールドが編集していた『ニュー・マッセズ』のバック・ナムバーなどを売りにゆくと、あるじと私の交渉をそばで眺めていた、ひどいオデコに黒いソフトをあみだにかぶった紳士が、横から「よし、それはぼくが買おう」と言った。すこし飲んでいるらしい。紳士は、あるじの値ぶみした額に古本屋のもうけをいくらか加えた金をさしだした。書物を手にすると、紳士はいきなり「きみ、飲みにいかないか」と私を誘った。

映画館の近くにあるおでん屋で、私たちはもうかなりながいこと飲んでた。なにをしゃべったか

は忘れた。酔つてくると、紳士は自分のかぶっていた黒いソフトをテーブルの上におき、こぶしをかためてはげしくなぐりはじめた。

「こいつは、警視総監の安倍源基だ。おれはあいつと学校でいっしょだったんだ。おい、きみもなぐれ」と言いながら。

私たちはさんさんに酔っぱらったが、それでも別れるときになると、紳士は私に一枚の名刺をくれて、「遊びにこいよ」と言うことを忘れなかった。名刺には、中野区桃園町 三木清と書いてあった。その後、私は改造社の編集部員になったので、あるときは原稿を頼みに、あるときはただ話を聴くためだけに、十日に一度ぐらいの割合で、ひろびろとした前庭のある三木さんの家を訪れることになった。

戦争の間を通じて、三木さんは私が誰よりも信頼していた人生の先生だった。

淡徳三郎と露和辞典

私が改造社に入ったのは昭和八年春のことで、最初の二年間ほどは出版部で働き、その後雑誌『文芸』の編集部に移された。

入社した年も暮れようとしているころ、出版部長の高平さんから「こんど改造社で出すことになった露和辞典を担当してくれ」と言われ、その編纂者となる淡徳三郎と直井武夫の両氏に紹介された。なにひとつロシア語を知らない私がなぜ担当者には選ばれたのかわからないが、私が英文科の出身だったからかもしれない。出版部にロシア語のわかる人は誰もいなかったが、私はロシア語のアルファベットぐらいは弁別ができた。

露和辞典の作業はすでに校正の段階に入っていたので、その後私は毎日のように自宅から直接に小石川の共同印刷へ通い、一週に一度だけ進度と会計の報告のために芝の改造社へ顔を出した。そんなふうにして、私はおよそ六カ月間、毎朝十時ごろから夜の八時ごろまで、淡、直井の両氏と生活をともにすることになった。淡さんのおくさんやお嬢さんにも紹介された記憶があるから、あるいは淡さ